

地域戦略研究所紀要

第4号

研究ノート

大学教育と地域との関係性をいかに構築するのか
—北九州市立大学 地域共生教育センターの事例を通じて—

石川 敬之 …… 125

北九州市立大学
地域戦略研究所
2019.3

大学教育と地域との関係性をいかに構築するのか

ー北九州市立大学 地域共生教育センターの事例を通じてー

石川敬之

- I 主体的な学びと大学教育
- II 主体的な学びを求める社会的背景
- III 地域貢献を通じた主体的な学び
- IV 地域活動を進めるために
- V 大学と学生の地域活動
 - 1. 大学ボランティアセンターの機能
 - 2. プラットフォームとしての 421Lab. ー地域と大学のつなぎ方ー
 - 3. 421Lab. が果たす役割
 - 4. 421Lab. での主体的な学び
- VI 421Lab. の課題と今後に向けて
- VII 最後に

〈要旨〉

現在、日本の多くの大学において学生ボランティアセンターの設置が進んでいる。その背景には、学生による地域貢献活動の推進支援もさることながら、地域での主体的な活動を通じた汎用的能力の向上という点も挙げられる。ただ、学生の学びを成り立たせるためには、大学のボランティアセンターが地域と大学を適切につなぎ、その継続的な信頼関係のもとでの学びのサポートが重要となってくる。

〈キーワード〉

主体的な学び (proactive learning)、経験学習 (Learning by experience)、大学ボランティアセンター (University Volunteer Center)、地域貢献活動 (Community Outreach)、学生運営スタッフ (Student Staff)

I. 主体的な学びと大学教育

現在、大学教育をすすめていくうえで様々な手法が取り入れられている。その多くは、これまでの大学教育のあり方を改善したり、補足したりすることを目的として導入されているものである。なかでも、とりわけ注目されているのが学生の主体的な学びを促す教育である¹⁾。主体的な学びとは、「学生が意欲的に学んだり、積極的に他者や対象に働きかけ

ながら進める学び」のことを指している（小針、2018）。例えば、特定のテーマについてグループディスカッションやディベートをしたり、学生自らが研究課題（テーマ）を決め、それに必要な資料やデータを収集しながら答えを導き出すといったことがある。また、講義で学んだことを社会に応用させたり、逆に実社会での体験を理論によって説明したりすることもある。つまり主体的な学びとは、教室において一方通行的な講義を行うということではなく、学生たちが学習内容に対してより積極的な関与を促すように工夫された教育のもとでの学びであるといえる。

現在のところ、こうした主体的な学びについては深い学びと理解が得られると考えられている（中井、2015）。教員が学生に質問を投げかけたり、特定のテーマについて議論や発表をしてもらうことで学生たちはより深く考える機会を得ることができ、それが学習内容の理解や知識の定着などにつながっていくと考えられている。また、自らテーマを設定することも学生自身の学びへの意欲や意識を喚起し、知識の獲得や理解を促すと考えられている。

一方、主体的な学びを通じて得られるものは学術的知識だけではない。グループで課題に取り組んだり、実際の現場に出向いて調査や実地体験をすることは社会的な能力の育成にもつながっていくと考えられている（中央教育審議会、2012；溝上、2014）。例えばグループ内のメンバーが協働で課題を進めていくためにはチームワークやコミュニケーション力が求められるが、学生たちは活動の過程において社会的・汎用的能力やソーシャルスキルの向上機会を得ることができると考えられている²⁾。また実際の現場ではリアルな社会のあり方にも触れることになるが、この時、例えばそれが社会的課題に関するものであれば、その課題への取り組みを通じて倫理観の醸成や市民性の獲得が期待できるとも考えられている。

以上から明らかになるのは、主体的な学びが目指すものが、いわゆる受け身の学びからの脱却であるということである（バー&タグ、2014）。与えられる知識をただ受け取るのではなく、学生自身が積極的に学びに関与していく場や機会をつくることで学ぶことの楽しさやその意義を知ってもらうように工夫されている。そしてそれらが学習者による学びへの意欲、モチベーションの向上につながっていくと考えられているのである。ここに主体的な学びの重要性がある。

II. 主体的な学びを求める社会的背景

では、なぜこのような主体的な学びが求められるようになってきたのであろうか。その理由の一つは、社会の大きな変化に対応できる人材が求められるようになってきたためである（中央教育審議会、2008）。現在の社会では急速にグローバル化が進み、また政治経済のあり方も複雑化している。加えて技術の進歩がそのような変化をますます加速させている。我々がこのような社会のなかで生きていくには、自分自身で考え、判断し、そして行動することが重要になってくるが、まさにここに主体的な学びが求められることになる。

知識を持っていることよりも、知識を活用することが重要になってくるためである。

またこうした時代や社会では、自ら知識を生み出すことも重要になる。複雑化する社会では従来とは異なる種類の課題が生じることになるが、それらを解決するためには、その本質を見極め、取り組むべき課題を設定し、解決に向けた具体的な行動が求められることになる。このとき主体的な学びを通じて得られる様々な能力はそうした課題への対応力をもたらすことになると言えるのである。さらに付け加えるならば、変化の激しい社会のなかでは常に知識のアップデートが必要になる。そしてそのためには学び続けることが求められる。学びの重要性を理解し、学びへの意欲や学ぶための力そのものを育てていくうえで、まさに主体的な学びの実践が必要となってくるのである。

Ⅲ. 地域貢献を通じた主体的な学び

こうして主体的な学びの重要性が認識されるにつれ、教育現場では学生の主体的な学びを引き出すための様々な手法や工夫がなされるようになってきた。具体的には、先にも述べたような授業内での様々なワークの実施やコメントシートなどを通じた教員とのコミュニケーションの促進といった取り組みが挙げられる。

一方、主体的な学びは教室の中だけではなく、学外でも取り組まれはじめている。例えばフィールドワークを通じた調査研究とその成果発表などは、以前にも増して盛んに行われるようになってきている。また国内外へのスタディツアーの実施や企業等との協働プロジェクトなども多く実施されている(村田、2018)。さらに近年になってより活発になされるようになってきているのが、地域貢献活動を通じた学びの実践である。これは学生たちが地域に赴き、地域の人々とともに地域の課題を共有しながらその課題解決に向けた取り組みを行っていくというものである。当然、学生たちによる地域での活動は様々な形態をとることになるが、地域のリアルな課題に対して自分たちで活動内容や達成地点を決め、地域の方々と協力し合いながら取り組んでいくことは共通している。また地域での活動はチームを組んで行われることが多いが、そうした活動も学生たちにとって大きな学びになっていく。様々な考えやバックグラウンドを持つ人々と関わりあうことで、お互いの役割分担やスケジュールの調整、またルールやマナーの順守、そしてコミュニケーション力といった社会的スキルを獲得していくと考えられている。さらに地域で活動に従事することは、学生にとって一市民、一個人としての成長機会を得ることにもなるとされている(シビックプライド研究会、2015)。例えば、地域の課題を知り、その課題に取り組むことで市民としての意識が芽生え、その責任感を持つに至ると考えられる。同時に課題解決への貢献を通じて地域への愛着や誇りを持つようになれば、シビックプライドの醸成にもつながっていくと言える³⁾。こうして地域での活動は学生の社会的成長を促し、教育された市民(educated citizen)の育成に寄与することになるのである。

逆に、地域の課題解決の過程においては大学で学んだ知識を活かすこともできる。理論の使い方、問題の本質を見極める力、解への道筋の立て方などは実際の地域での活動に適

応することができる。また、地域で観察される現象から帰納的に理論研究を進めることも可能である。こうして地域での活動は学生たちに多くの学びの機会とそこからの新たな知識の獲得をもたらすのである。

IV. 地域活動を進めるために

以上で見てきたように地域での活動は学生にとって多くの学びの機会を提供するが、問題はそうした地域活動をいかにして大学側が準備するのかということである。学生が地域で活動し、かつそれに主体的にかかわるには、そのための適切な仕組みが必要になってくる。とりわけ、より多くの学生に継続して地域活動に従事してもらうためには、個々の教員レベルというよりも大学としての取り組みが重要になってくると言える。こうした観点から、本稿では、現在、大学と地域を結び、学生の地域活動を支援するうえで重要な役割を果たしつつある地域連携のための学内組織、いわゆる大学のボランティアセンターについて検討する。具体的には、筆者が所属し、その業務運営を行っている北九州市立大学地域共生教育センターを取り上げ、学生の地域貢献活動とそこでの学びを支える仕組みについて報告する。学生と地域を結び、かつ学生の主体的な地域活動を促すためには様々なことが求められるが、それらをどのようにして成り立たせていくのかということの本稿の事例を通じて検討していく。

V. 大学と学生の地域活動

1. 大学ボランティアセンターの機能

学生たちは地域での活動を通じて様々な経験をし、貴重な学びの機会を得る。また学生を受け入れ、学生と共に活動する地域も大きな影響を受ける。学生らとともに活動し、その真摯な活動に刺激されることで住民たちも地域と向き合うようになり、それが地域の課題の解決につながり、地域も変わっていくのである。地域で学ぶ学生の活動は、こうして学生の成長と地域の発展に貢献することになる。

では、このような地域と学生の活動をどのように実施していけばよいのだろうか。そのための一つのアプローチとなりえるのが大学におけるボランティアセンターや地域連携室などの存在である。近年、多くの大学では、学生による地域活動の重要性が広く認識されるようになるなかで、大学と地域とをつなぐための組織や部署が設置され始めている。非営利活動法人ユースビジョンの調査によれば、2016 年末現在、全国の 155 の大学（キャンパス）にボランティアセンターが設置されているという⁴⁾。実際のところ、そうしたボランティアセンターの組織形態や運営方法などは大学ごとで異なっており、例えば専属の教職員が配置され、独立した組織として設置されている大学もあれば、学生支援室や総務課などの部署内に配置されている場合もある。あるいは大学生が自主的にそうした組織を運営し、そこに一部の教職員が「ボランティア」としてかかわっているようなケースもある。ただユースビジョンも指摘するように、近年ではボランティアにかかわりたいと考え

る学生が増えるなかで、独立したボランティアセンターの設置が進みつつある。地域からの相談やボランティアの募集も増え、また地域に出て活動したいとする学生らの思いに応えるうえでも大学におけるボランティアセンターの重要性が高まってきているのである。では、こうした大学に設置されるボランティアセンターの機能とは一体どのようなものなのだろうか。

実は、大学に設置されるボランティアセンターには様々な役割が求められる。地域と大学・大学生をつなぐことはもちろんのこと、大学として次世代の人材を育てることも重要になる。逆に言えば、この役割を担ってこそ大学のボランティアセンターだと言える。

より具体的に見ていくと、まず大学のボランティアセンターには地域から寄せられる様々な地域活動の情報をまとめ、それを学内に発信することが求められる。またそうした情報は学生の学びに資するものであることが望まれるため、その選択が必要になる。さらに実際の情報を見て地域活動への応募に来た学生に対し、その活動を通じた学びが促進されるようサポートしていくことが求められる。つまり、学生の学びとなる情報の発信と実際の学びのサポートが大学のボランティアセンターに求められる第一の役割となる。

一方、大学のボランティアセンターには、地域活動を実際に進めて行くうえで必要となる様々な調整や手続きといったものも求められる。これが第二の役割である。大学を通じた地域活動が、学生にとっても、また地域にとっても有意義なものになるためには、それぞれのニーズをマッチさせることが必要である。ただ、学生と地域の最適な出会いをつくりだすことは簡単ではない。例えば地域からの活動募集の情報を学内に発信する際には、その活動の内容を事前に詳しく説明する必要があり、また地域活動するうえでのマナーや心構えについても伝えなければならない。と同時にボランティア保険の加入案内や手続きなども必要になってくる。さらに言えば、ボランティアセンターは地域側とのやり取りも求められる。ここで最も重要なのは、学生を受け入れてもらううえでの教育的配慮をお願いすることである。単なる人的補助ではなく、学生にとって意義ある経験や学びとなるよう指導やサポートをお願いすることになる。逆に地域からの苦情やトラブルなどに対してもボランティアセンターは迅速に対応しなければならない。こうして学生と地域をうまくつなぐためには非常に多くのプロセスが必要になってくるのである。

当然、以上で挙げたもの以外にも、多様化する学生や地域からのニーズへの対応や地域での経験を学びに変えていくための体系立てた教育的指導など、大学のボランティアセンターには多くのことが求められる。しかしながら、その一方で、現在の大学におけるボランティアセンターは、どこも厳しい制約の中で運営せざるを得ない状況にある。特に人材不足は大きな問題となっている。本来であれば、専門の職員やボランティアコーディネートの資格を持った人員が配置されることで地域と学生とをより良くつなぐことができる。しかし現状はそうではなく、専属のボランティアコーディネーターを設置している大学は少数である。そのような意味で、学生の地域活動とそれを通じた学びの実践が十分に確保されている大学のボランティアセンターはそう多くないと言えるかもしれない。

そうしたなか、本稿で取り上げる北九州市立大学の地域共生教育センターは学生の地域活動と学びのサポートにおいて一定の成果を上げているケースだといえる。地域共生教育センター、通称 421Lab.は、その設立以来、地域と大学をつなぎ、学生による地域貢献活動を支援する仕組みを組織として作り上げ、学生と地域の両者にとって重要な役割を果たしてきたと言える。以下では、ボランティアセンターとしての 421Lab.の概要、また 421Lab.を通じた地域と大学の関係、そして 421Lab.がサポートする学生の学びについてみていきたいと思う。

2. プラットフォームとしての 421Lab. —地域と大学のつなぎ方—

北九州市立大学の地域共生教育センター（421Lab.）は、2010（平成 22）年の 4 月 21 日に開設された。開設にあたっては、「地域社会における実践活動を通じて次世代を担う人材の育成を目指すとともに、本学の地域貢献活動をより広く進めていく」という目的が掲げられた。また、大学が立地する北九州市には解決すべき地域課題が多く見られ、公立大学の責務としてもそうした課題に取り組む必要性があった。そういう背景のもと、421Lab.は学生と地域をつなぎ、かつ地域貢献と人材育成を目指して開設されることになったのである。

当初、センターには、特任教員 2 人と事務職員 1 人を置くことが定められた。加えて全学的な教学組織として位置づけられることで専任教員を置くことも可能になった。これは、他大学との比較で言えば非常に充実した人員体制であったと言える。ちなみに現在では事務職員が 2 名となり、センター長を含めて 6 名体制で日々の運営がなされている。

それでは、大学と地域をつなぐという役割を果たすために 421Lab.が実行していることについて具体的に見ていくことにする。まず 421Lab.というのは、いわば大学と地域をつなぐ「プラットフォーム」だと言える。421Lab.では、日々、人と情報が行き交っており、地域活動を促進させる機会が生み出されている。大学生と一緒に活動したい地域の方、キャンパスを飛び出し地域のために活動したい大学生、また地元の企業や行政関係者、さらには全国の大学の教職員が 421Lab.に来て地域活動に関する情報を伝え、また情報を得ていく。421Lab.の果たす役割とは、まさにプラットフォームとしてこうした人々をつなぎ、地域活動に関する情報と機会を提供すること、そして優れた地域活動の推進を支えることだと言えるのである。以下ではさらに具体的に、日々の 421Lab.の事業内容とその機能について説明していくことにする。

3. 421Lab. が果たす役割

①情報の整理と発信

まず 421Lab.の最も重要な業務のひとつに地域活動に関する情報の整理と発信がある。前述のように、421Lab.には様々な情報や相談が寄せられる。それらは地域活動への参加募集に関するものであったり、セミナーや交流会などの告知であったり、あるいは、まだ

具体的な活動になる前の事前相談であったりする。421Lab.はこれらの情報を整理し、学内の地域活動を行いたい学生に向けて発信する。そして学生と地域とのマッチングを行っていくのである。ちなみに、421lab.が地域活動の情報を整理する際に気を付けているのが、その活動が学生の学びに貢献するかという点である。実際のところ、地域からの相談の全てが学生の学びにつながるというわけではなく、なかには人員補助のような依頼も存在する。したがって421Lab.の教職員スタッフは、地域から寄せられる情報の一つひとつを精査しながら学生の学びになるものを選んでいく。そして学生にとって学びになり、かつ地域社会にも貢献するものを学内に発信していくのである。ちなみに現在の421Lab.における情報発信の方法としては、登録メーリングリストの活用、案内ポスターの掲示、各種SNSメディアの利用がある。メーリングリストの登録数は増加傾向にあり、現時点では421Lab.があるキャンパスに通う全学生のおおよそ3人に1人が登録している。このメーリングリストは421Lab.の職員によって管理され、随時、地域活動に関する情報を発信している。案内ポスターの作成と掲示、およびSNSによる発信については、この後で述べる学生運営スタッフによって行われている。こうして421Lab.が発信する情報によって、大学と地域がつながっていくことになる⁵⁾。

②学びを支える仕組みづくり

続いてもうひとつ、大学と地域をつなげるプラットフォームとして421Lab.が行っている重要な仕事に、年間を通じて実施される様々な研修会や勉強会の企画と運営がある。これらは地域活動に参加する大学生、および地域住民の方々を対象とするもので、地域での活動をより有意義なものにするために行われている。大学と地域をつなぐということは単に学生を地域に送り出すことではなく、本当の意味で地域と大学がつながるためには、お互いが地域での活動の意義を理解する必要がある。そして、地域活動に参加する人々がそこでの協働から深い学びを得ることで、表面的ではない本当のつながりがもたらされると言える。このような考えのもと、421Lab.では、そうした地域活動の意義と魅力を伝えるための機会を年間を通じて提供しているのである。具体的に挙げていくと、まず新年度のはじめに「スタートアップ研修」を実施し、初めて地域活動に参加する新規のメンバーに地域活動を行ううえでの注意点を説明したり、自らの活動の目的や目標を確認してもらっている。これらは、地域での活動が参加者の主体性のもとで行われるということを理解してもらうために実施されるものである。また共に活動するメンバーや地域の方々との顔合わせ、さらにチーム全体の目的の共有なども行ってもらうプログラムになっている。このスタートアップ研修が終わり通常地域活動が始まると、次は大学のスケジュールに合わせるかたちで、夏季休暇の前後に「前期振り返り研修」と「後期スタートアップ研修」を実施している。ここではそれまでの活動を振り返るとともに、活動目標の再確認や新たな課題の洗い出しなどを行っている。これらの研修に参加してもらうことで活動の中だるみを防ぎ、各メンバーのモチベーションの維持に努めている。また学期中には、地域での活動

に役立つような各種の勉強会も随時実施している。そして最後は、一年間の活動の集大成として、年度末の活動発表会を開催している。地域活動を行ったすべてのプロジェクトに集まってもらい、その年の活動の成果や自分たちの成長、また来年度に向けた挑戦などを発表してもらっている。

421Lab によるこうしたイベントは、地域活動を行う大学生、および地域の方々に、より優れた活動を行ってもらうことと同時に、そうした活動から多くを学んでもらうことを目的として実施されている。大学と地域社会というこれまで深く関わってこなかった両者がつながっていくためには、お互いがビジョンを共有し、共に学び、そして自分たちの活動の意義を理解する必要がある。それがなされることで初めて大学と地域は深くつながることができると言える。421Lab.では、こうした地道な取り組みが大学と地域をつなぐための第一歩だと考えているのである。

③持続可能な組織運営体制の維持－「学生運営スタッフ」との協働とサポート－

さて、421Lab.の重要な業務として最後に取り上げるのは、「地域共生教育センター学生運営スタッフ」との協働とサポートである。学生運営スタッフとは 421Lab.の業務や企画運営などをサポートしてくれる学生である。日頃より 421Lab.の教職員と協力し、421Lab.が開催するイベントや研修会の企画運営、421lab.に寄せられる地域活動の案内や広報などを行ってくれている。また学生運営スタッフ自身も地域に赴き、積極的に地域貢献活動に取り組んでいる。組織としての 421Lab.は、この学生運営スタッフをサポートしつつ、かつ共に有意義な活動を行っていくことを目指している。

421Lab.による学生運営スタッフへのサポートとしては、基本的には助言や軌道修正といったものが中心となる。このような方法が取る理由は、421Lab.が学生運営スタッフの主体性を重視するためである。学生運営スタッフは、ある意味、教職員よりも地域や学生と接する機会が多く、それぞれの現場にて状況に応じた適切な行動をとることが求められる。そのため学生運営スタッフは自らの考えと判断によって行動することが必要になる。そうした意味で、421Lab.としては、日頃から学生運営スタッフに主体性をもって業務に携わり、また自らで考え、行動する力を培ってもらおうとしている。学生運営スタッフがそのような力を持つことで、結果として、大学と地域がうまくつながっていくと考えているのである。ただ、主体性の尊重は重要であるが簡単なことでない。学生らの意向を聞きつつも 421Lab.としての仕事の質を担保するには、時として教職員による指導が必要な場合もある。そしてこの時、学生運営スタッフのモチベーションを維持し、かつ学びと経験を促していくには相応の労力と技量が求められる。421Lab.だけでなく、多くの大学のボランティアセンター教職員にとって、こうした学生へのサポート、および関係性の構築は極めて重要で、また難しい仕事である。しかし大学のボランティアセンターは教職員だけで成り立っているわけではない。実際に地域で活動を行い、大学と地域をつないでいるのは学生である。そして、その学生を同じ立場からサポートするのが学生運営スタッフであ

る。その意味で大学のボランティアセンターを本当の意味で支えているのは学生運営スタッフかもしれない。学生運営スタッフを組織としてサポートすることは、大学ボランティアセンターを機能させることにそのままつながっていく。ここに学生運営スタッフをサポートする業務の重要性があると言えるのである。

4. 421Lab. での主体的な学び

2010年の設立以降、421Lab.は大学と地域をつなぐプラットフォームとしての機能を果たしてきた。組織として421Lab.が行ってきた様々な活動、すなわち地域活動に関する情報の収集と発信、地域で活動する学生のサポート、持続可能な組織運営体制の維持といった各取り組みは、大学と地域の協働を支え、促進するものであったと言える。また、こうした421Lab.の活動は、学生による主体的な学びをもたらすものでもあった。主体的な学びは学生の積極的な関わりを必要とするが、これは地域活動を通じた学びでも同様である。地域活動から学びや気づきを得るためには学生自身が地域に関心をもち、活動に対して積極的でなければならない。421Lab.の研修会や勉強会にて地域活動の魅力や意義を伝えているのは、まさにそのためであったと言える。さらに言えば、地域での学びが成り立つには、その継続した活動が必要になる。一度や二度の地域活動だけで優れた学びが得られることはあまりない。地域での活動を継続することによって地域への理解が深まり、なすべきことも見えてくる。そして実際に行動に移し、なおかつそのフィードバックを得ることで学びはもたらされることになる。421Lab.では、学生と地域の関係性を維持するために、日々様々な調整を行っている。結果、421Lab.の学生プロジェクトの多くは年度を超えた活動となり、中には421Lab.の開設当初から続くものもある。そうした活動のなかで学生の学びは促進され、蓄積されているのである。

VI. 421Lab. の課題と今後に向けて

現在の421Lab.と学生運営スタッフを取り巻く状況は比較的良好であり、学生の地域活動やそこでの学びのサポートに成功しているといえる。ただ、まったく課題がないわけではない。ここでは、より早急に取り組むべきだと考えられる二つの課題について述べたいと思う。

まずは学生運営スタッフに対する体系的な教育・育成プログラムの開発である。学生運営スタッフは現在の421Lab.にとっていなくてはならない存在であるが、最初から全員が優れた能力を発揮できているというわけではない。すぐに一人前の学生運営スタッフになれる学生もいれば、少し時間がかかる学生も当然いる。したがって421Lab.では、学生運営スタッフの全員が着実に成長できるようなサポートを進めていく必要がある。現在も各種のセミナーや研修会への参加を支援したり、外部講師を招いて必要な知識やスキルを学んでもらったりもしているが、これらの研修は全体として体系化されているわけではない。例年実施しているものもあれば、年度によって実施状況や内容が異なる場合もある。今後、

さらなる学生運営スタッフのレベルアップをはかるためには、どのような研修をどのように継続実施していくのかということを考えていく必要がある。またそのためには研修の実施効果を測定し、かつ評価していくことが求められるが、残念ながらそれらについてはいまだ手探りの状態である。まずはこうした課題についてしっかりと検討していく必要がある。

もうひとつの課題は、伝統と革新のジレンマとでも言うべきものである。学生運営スタッフは 421Lab. の設立と同時に生まれ、全くゼロからのスタートを切った。そのため設立当時のメンバーたちは、「自分たちがすべきことは何だろう」ということを自問しながら活動をしてきたと言う。例えば、企画する事業の目的、他の学生への支援のあり方、教職員との関係、また自分達自身の存在意義までもスタッフ同士で話し合い、試行錯誤を重ねながらその答えを見つけようとしてきた。そうした努力の積み重ねのなかで学生運営スタッフとしてのあるべき姿、また果たすべき役割などが確立されてきたと言える。そして現在、それらは伝統となり歴代の学生運営スタッフに受け継がれている。学生運営スタッフとしての強みは、まさにここにある。しかしながら、こうした蓄積は時として新たなものを生み出すうえでの足かせにもなりうる。先輩がつくりあげた仕組みや文化が現役の学生運営スタッフにとって自明なものとなり、後輩たちはそれを引き継ぐことが仕事であると考えようになってしまうのである（佐藤・山田、2004）。確かに 421Lab. の運営に携わっていくうえで過去の仕事を引き継ぐことは重要である。また、より効率的な仕事の進め方を追求していくことも必要である。しかし、大学と地域をつなぐためには多様なアプローチが必要であり、学生運営スタッフ自身も 421Lab. の教職員と共にその様々な可能性を考えていかなければならない。そして、そのためには伝統に縛られることなく、常にあたらしいものを求める姿勢が重要となる。そうしたマインドを学生運営スタッフに持ち続けてもらい、良い意味でいかに伝統を革新していくか。これが 421lab. のこれからにとっての大きな課題である。

VII. 最後に

2010 年の設立以降、421Lab. と学生運営スタッフは、地域と大学をつなぐ存在として大きな役割を果たしてきた。地域との関係を開拓し、地域で活動する学生をサポートし、また自らも地域での活動を行ってきた。そうした活動を続けてきたことで地域から信頼を得、良好な関係性を築くことができたといえる。また学生たちも地域での活動から多くを学び、成長を遂げてきた。地域貢献を通じて次世代を担う人材を育成することは 421Lab. の当初からの理念であるが、それはいまでも引き継がれていると言える。大学におけるボランティアセンターのあり方について、その全てに当てはまる共通の解は当然存在しない。しかし 421Lab. のこれまでの歩みはひとつの有望な方向性を示していると考えられる。地域それ自体は、決して学生の学びのために存在しているわけではない。学生自身が地域に身を置き、市民と協働し、信頼関係を積み上げていくなかで、初めて学びへの第一歩を踏み出す

ことができる。大学として学生を地域に送り出す側は、決してこのことを忘れてはいけないのである。

(本学 地域共生教育センター 准教授)

[注]

- 1) 2012年8月中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて―生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ―」。
- 2) 上掲：中教審(2012)答申より。
- 3) さらに言えば、地域での活動を通じては、学生たちのキャリアにも大きな影響を与えるともいえる。自分がやりたかったこと、または、なすべきことに出会い、そこから大学で学ぶべきことを知り、そして将来に向けての進路を決定していくことも考えられるのである。
- 4) 赤澤清孝 (2017)「大学ボランティアセンターの歴史と動向」、『かながわ政策研究・大学連携ジャーナル』No.11,pp.25-28。
- 5) 以上のような方法で地域活動の情報は広く学内に周知され、関心を持った学生は応募のために421ab.に訪れることになる。421Lab.では、職員や学生運営スタッフが地域活動の内容や活動を行うにあたっての諸連絡を伝え、その後、学生は地域に出向くことになる。活動が終わると「地域活動報告書」を提出してもらい、活動は終了となる。

[参考文献]

- 小針 誠 (2018)『アクティブラーニング 学校教育の理想と現実』講談社。
- 佐藤郁哉、山田真茂留 (2004)『制度と文化―組織を動かす見えない力』日本経済新聞社。
- シビックプライド研究会編 (2015)『シビックプライド2 【国内編】一都市と市民のかかわりをデザインする』 宣伝会議。
- 中央教育審議会 (2012)『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』 文部科学省。
- 中央教育審議会 (2008)『学士課程教育の構築に向けて』 文部科学省。
- 中井俊樹 (2015)『アクティブラーニング』 玉川大学出版部。
- バー・R.、タグ・J (2014)「教育から学習への転換」 主体的学び研究所編『主体的学び』 1号 pp.3-31。
- 溝上慎一 (2014)『アクティブラーニングと教育学習パラダイムの転換』 東信堂。
- 村田晶子編 (2018)『大学における多文化体験学習への挑戦：国内と海外を結ぶ体験的学びの可視化を支援する』 ナカニシヤ出版。

STUDIES
OF
INSTITUTE FOR
REGIONAL STRATEGY
CONTENTS

Research Notes

How should an university volunteer center forge a close relationship
between students and local community.

Takayuki ISHIKAWA 125

No.4
March 2019
INSTITUTE FOR REGIONAL, STRATEGY
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
KITAKYUSHU CITY, JAPAN